

平成16年度

独立行政法人国立美術館
東京国立近代美術館フィルムセンター

実績報告書

目 次

フィルムセンターの概要	3
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	4
国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	7
1. 収集保管	7
(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況	7
(2) 保管の状況	9
(3) 修理の状況	11
2. 公衆への観覧	12
(1) 展覧会・企画上映等の状況	12
企画上映「キューバ映画への旅」	14
企画上映「日本アニメーション映画史」	15
企画上映「映画女優 高峰秀子」	17
企画上映「特集・逝ける映画人を偲んで 2002 - 2003」	18
特別企画上映「シネマの冒険 闇と音楽 アメリカ無声映画傑作選」	19
企画上映「フィルムは記録する2005:日本の文化・記録映画作家たち」	20
共催上映「アジア映画 “豊穡と多様”」	21
共催上映「第5回東京フィルメックス 特集上映 内田吐夢監督選集 映画真剣勝負」	22
「造形作品でみる 岡本忠成 アニメーションの世界」展(併設:「展覧会 映画遺産」展)	23
「映画女優 高峰秀子展」(併設:「展覧会 映画遺産」展)	25
優秀映画鑑賞推進事業	27
(2) 貸与・特別観覧の状況	29
3. 調査研究	31
4. 教育普及	33
(1) - 1 資料の収集及び公開(閲覧)の状況	36
(1) - 2 広報活動の状況	37
(1) - 3 デジタル化の状況	39
(2) - 1 児童生徒を対象とした事業	40
(2) - 2 講演会等の事業	41
(3) - 1 研修の取組	43
(3) - 2 大学等との連携	45
(3) - 3 ボランティアの活用状況	46
(4) 渉外活動	47
5. その他の入館者サービス	48

フィルムセンターの概要

1. 目的

フィルムセンターは、昭和27年の近代美術館開館当初にフィルム・ライブラリーとして発足した。その文化的、芸術的、歴史的価値に鑑みて、映画についても美術館の対象領域と位置付けられたものである。

フィルムセンターは、同種の施設が皆無であることもあり、映画に関する総合的な歴史博物館として映画フィルムや映画の関連資料を可能なかぎり網羅的に収集、保管、公開し、わが国の映画文化全般にわたって中核的な研究・普及機関としての役割を担っている。

発足した当時は、美術展に関連した美術映画を週1、2回程度上映するとともに主に劇映画フィルムの収集を行っていた。昭和37年にフランスとの交換映画祭を開催したことを契機に、以後諸外国との交換映画祭が活発に開催されるようになり、上映活動も1日1回程度に拡充された。また、同時に諸外国で開催される映画祭での日本映画上映のためにフィルム収集が活発に行われるようになった。

その後、昭和42年から3年間、戦後GHQに接收された可燃性の日本映画の返還が行われ、これの不燃化作業が実施されることで、所蔵映画フィルムの充実が図られた。昭和44年の美術館の移転に伴い、昭和45年にはフィルム・ライブラリー業務の拡充と上映施設及び映画に関する展示室が整備されてフィルムセンターとして開館した。昭和61年に映画フィルム専用の保存施設が神奈川県相模原市に設置された。平成7年には旧施設の全面改築によって施設規模も拡充し、収集・保存・上映事業も充実して、今日に至っている。

2. 土地・建物

(1) フィルムセンター

建面積	727㎡
延べ面積	6,912㎡
展示面積	343㎡
収蔵庫面積	341㎡

(2) フィルムセンター相模原分館

建面積	1,311㎡
延べ面積	4,344㎡
保存庫面積	2,022㎡

3. 定員 11人

4. 予算 949,348,000円

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画

- 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
 - (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
 - (2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - (3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - (4) 外部委託の推進
 - (5) 事務のOA化の推進
 - (6) 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - (7) 積極的な一般競争入札を導入
- 2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

実績

1. 業務の一元化
本部において、これまで行っている一元化に加え、情報公開制度の共通的な事務を一元化した。
2. 省エネルギー等(リサイクル)
 - (1) 光熱水量
フィルムセンター
光熱水量(料)の節約・効率化の推進は毎年度行っているところであるが、平成16年度は、フィルムセンター内の国立新美術館設立準備室職員の増員による使用量の指標数値の設定が難しく、実績による分析を行い基本料金の削減、節約を図ったが、結果として電気量・水道量ともに増加した。
ア. 電気 使用量1,027,371kwh(平成15年度比109.62%) 料金20,683,808円(平成15年度比101.63%)
イ. 水道 使用量3,634m³ (平成15年度比103.71%) 料金2,070,604円(平成15年度比100.84%)
相模原分館
前年度同様、適用料金が低廉な電力供給契約への見直しにより電気料金の低減を図ったが、季節の寒暖及び寄贈作品や寄託作品の受入のための作業等により電気量・水道量ともに増加した。
ア. 電気 使用量1,168,169kwh(平成15年度比108.94%) 料金15,392,367円(平成15年度比103.42%)
イ. 水道 使用量158m³ (平成15年度比164.58%) 料金29,500円(平成15年度比170.09%)
 - (2) 廃棄物処理量
一般廃棄物量及び処理料が増加した要因は、国立新美術館設立準備室の開館準備のため、新聞・雑誌・段ボールなどの別途に収集が必要となる廃棄物が増えたことによる。
また、産業廃棄物が増加した要因は、フィルム缶の廃棄処理を行ったことによる。なお、前年度より寄贈フィルム本数が増加していることなどから、前年度以上のフィルム缶の廃棄処理を行った。
フィルムセンター
ア. 一般廃棄物 12,640Kg(平成15年度比 107.85%) 料金295,890円(平成15年度比 138.26%)
イ. 産業廃棄物 20,470Kg(平成15年度比 159.30%) 料金519,326円(平成15年度比 150.77%)
相模原分館
ア. 一般廃棄物 - Kg(平成15年度比 - %) 料金 - 円(平成15年度比 - %)
イ. 産業廃棄物 5,870Kg(平成15年度比 162.42%) 料金282,633円(平成15年度比 91.05%)
 - (3) その他 古紙の再利用、OA機器用のトナーカートリッジのリサイクルによる再生使用。
3. 施設の有効利用
 - (1) 小ホール
小ホールについて、フィルムセンターの事業に差し支えない範囲で外部への貸し付けをおこなった。
小ホールの利用率 22.74% (83日/365日)
フィルムセンター事業 63日(特別映写観覧58日、講演会1日、養成講座4日)
外部への貸し付け 29日(建物使用11日、芸術祭15日、その他3日)
重複日 9日

(2)会議室

会議室について、フィルムセンターの事業に差し支えない範囲で外部への貸し付けをおこなった。

会議室の利用率 44.11% (161日 / 365日)

フィルムセンター事業 133日 (フィルムセンター使用7日、国立新美術館設立準備室使用126日)

外部への貸し付け 47日 (建物使用28日、文化庁関係19日)

重複日 19日

(3)相模原分館

相模原分館映写ホールの利用率 1.37% (5日 / 365日)

フィルムセンター事業 5日 (小中学生向け上映会2日、特別映写3日)

4. 外部委託

(1) 清掃業務

(4) 大ホールの映写業務

(2) 機械設備等維持及び運転管理業務

(5) 夜間及び休館日の機械警備業務

(3) 受付、出札、警備等の会場管理業務

(6) その他、設備関係のメンテナンス業務

5. O A化

館内LANの整備状況

フィルムセンター事務室、映写室、図書室、収蔵庫等の館内LAN及び相模原分館とのデジタル専用回線を利用した通信が整備されており、職員へパソコンを各1台配置し、館内、相模原分館及び本館等に電子メールによる事務連絡等を行った。

なお、平成16年度は、フィルムセンターと本館との間のデジタル専用回線を128Kbpsから1500Kbpsへ変更して接続速度を速めたことにより、容量の大きなデータのやりとりが可能となるなど、電子メール等による事務連絡の効率化を行った。

・紙の使用量 A4判 222,500枚(平成15年度比 72.36%)

A3判 9,000枚(平成15年度比 60.00%)

B4判 17,500枚(平成15年度比 116.67%)

B5判 10,000枚(平成15年度比 400.00%)

6. 一般競争入札

映画フィルムの購入契約は、著作権者との契約による購入となるため、競争入札では入手できない。

そのほかは東京国立近代美術館に含まれる。

7. 評議員会、外部評価委員会

(1)評議員会

開催回数 2回

議事内容

第1回:平成16年6月15日(火)

平成15年度事業実績報告及び文化庁で行われた「フィルムセンターの在り方に関する検討会」についての報告、意見交換。

第2回:平成17年3月18日(金)

平成16年度事業実績経過報告及び平成17年度事業実施計画について協議。

8. その他

7階「映画の広場」を、1階に移転。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

電力の需要契約の見直しを図り、基本料金の減額を行った。

水道設備を自動水栓化することにより、観覧者の利便性と水道量の減量化を行った。

【見直し又は改善を要する点】

大ホールの使用に際し、季節外れの寒暖差が生じた際にホール内の温湿度の調整が対応しきれなくなる事態があった。今後は、早期の空調システムの冷暖の切替や早い時間からの起動などにより、ホール内の環境を早めに安定させて対応する必要がある。

相模原分館映写ホールについては、活用を図るための検討を継続していく必要がある。

【計画を達成するため障害となっている点】

入場者数の増減や、温暖化による季節の寒暖により、光熱水量が増減することになり、それを正確に把握することが困難である。

相模原分館ホールについては、活用を図るための検討を継続しているが、立地条件と限られた人員での運営とにより、外部との連携等の活用のための方策を見出すことが難しい状況である。

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 収集・保管

(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況

中期計画
(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。
(東京国立近代美術館)
近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。
また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。
(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。

実 績

1. 映画フィルム			
購入等	958点		
寄 贈	6,984点		
寄 託	4,673点		
2. 映画関連資料			
寄 贈	15件 355点		
3. 陳列品購入費	予算額 339,464,000円	決算額 336,972,125円	

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】
平成16年度は、各社からの購入、所蔵フィルムの不燃化や複製、寄贈等によって収蔵本数は、7,942本の増加となった。平成13年度より、主として社団法人映像文化製作者連盟加盟の文化・記録映画(短篇映画)製作会社に対し、「原版寄贈」の呼びかけを行っているが、平成16年度は、株式会社読売映像、株式会社クリックス、独立行政法人国際交流基金、精光映画社等の企業や団体について、寄贈手続きを完了した。原版フィルムという最終素材を永久保存する場としてのフィルムセンターの役割は、文化・記録映画のみならず劇映画の分野においても広がりを見せ、前年度の角川大映株式会社(現角川映画株式会社)に続き、平成16年度は松竹株式会社より4,040本に及ぶ大量の原版寄託を受けた。また、日活株式会社、劇団前進座株式会社、月桂冠株式会社等から、日本劇映画および文化・記録映画の可燃性原版の寄贈を受けるとともに、横山隆一氏の遺族より氏の製作した日本アニメーション映画404本の原版をはじめとする大量の寄贈を受けた。
購入については、企画上映「映画女優 高峰秀子」のために、未収蔵であった出演作品のポジプリントおよびデューブネガを多数購入したほか、東京フィルメックスとの共催企画「内田吐夢監督選集」のために、同監督作品の英語字幕付きプリントの購入を行った。また、企画上映「日本アニメーション映画史」「フィルムは記録する2005」のために、多くの日本アニメーション映画、文化・記録映画を購入するとともに、次年度開催の企画上映「映画監督 稲垣浩」のために先行調査および購入を行った。海外同種機関との協力関係の中では、ロシアのゴスフィルムフォンドが所蔵する日本映画の中から297本を購入するとともに、中国の電影資料館が所蔵する中国映画の中から1940年代、1950年代の代表作を5本購入した。
映画関連資料については15件の寄贈を受けたが、映写機などの映画機材の寄贈がそのうちの半数を占めている。これは常設展示を通してフィルムセンターの収集活動に対する認知が高まったことが功を奏している。この結果、国産映写機メーカーである高密工業や高橋工場の社内資料、現存が稀な国産 17.5mm 映写機の実物など歴史的に貴重な資料を入手することができた。

【見直し又は改善を要する点】

平成16年度に受け入れた映画フィルムのは、大量の原版寄贈と購入数の増加に伴い、前年度の4倍を上回る膨大なものとなった。そのため、フィルムの調査や効率的な収納を行うためのフィルムのつなぎ替え等仕様変更に伴う要員の確保と、その作業のために必要なフィルム編集機等の機材の確保や保守が急務である。

映画関連資料については、映写機などの技術資料が今後増加していくことが予想されるため、その保管場所の確保について検討が必要である。

【計画を達成するために障害となっている点】

ここ数年の大量寄贈や寄託等により、平成16年度末までに保存庫の収納率はすでに60%を超えており、保存庫の増築については本格的に検討していく必要がある。また、大手製作会社による日本劇映画フィルムの所在確認と収集は、フィルム寄託の進展とともに、今後とも継続していくことが必要である。一方、独立系製作会社のフィルムについては、協同組合日本映画製作者協会の協力を得て、原版の所在確認と収集に着手したが、大手製作会社に比べ散逸の可能性の高いこれらの映画フィルムについては、今後とも所在確認と収集を計画的に行うことが重要である。また、製作者以外が所有している映画フィルムについては、新たな発見をもたらすために、国内での情報ネットワークをより一層緊密にしていく必要がある。

映画関連資料については、国内に映画の専門機関が限られていることから、フィルムセンターに寄せられる映画資料の数は増加の一途をたどっている一方で、担当係の研究員が1名であることから寄贈受入処理に伴う調査などに時間を要しており、要員の確保と受け入れ体制の整備が必要である。

* 添付資料

収集した映画フィルム件数の推移（事業実績統計表 p.1）

購入・寄贈映画フィルムの一覧（事業実績統計表 p.19）

(2) 保管の状況

中期計画

- (2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。
- (2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

実績

1. 温湿度

(1) フィルムセンター

展示会場

空調実施時間 9:30～21:30(ただし、土・日・月曜日は9:30～18:30)

温度 22 ± 2 (ただし、夏季は24 ± 2) 湿度 50% ± 5%

原則として設定された温・湿度で管理を行ったが、外気温度との差により入館者のために最高25℃までを許容温度とした。

24時間空調が望ましいが、経費等を考慮して入館時間のみでの運転時間とした。

収蔵庫

空調実施時間 10:00～20:00(ただし、土・日・月曜日は10:00～18:30)

温度 23 ± 2 湿度 55% ± 5%

収蔵庫は地下3階に位置し、庫内の出入りがない場合は殆ど温・湿度に変化が生じないため、設備管理要員がいる間のみでの運転とした。

(2) 相模原分館

収蔵庫

空調実施時間 24時間

(地下1階保存庫) 温度 10 ± 2 湿度 40% ± 5%

(地下2階保存庫) 温度 5 ± 2 湿度 40% ± 5%

(特別保存庫) 温度 2 ± 2 湿度 35% ± 5%

2. 照明

フィルムセンター7階展示室内のポスター、スチル写真等は100ルクスを上限とするとともに入館者の有無を自動的に感知して照明の起動が行われるように設定し、作品への影響の低減化及び省エネルギー化を行った。

3. 空気汚染

空調熱源に関しては、全て電気で賄っているため、施設設備からの空気汚染は発生しなかった。

また、施設内については、「建築物の衛生的環境の確保に関する法律」に基づき空気環境測定を実施した。

4. 防災

(1) フィルムセンター収蔵庫の消火設備は二酸化炭素消火設備を設置。

(2) 相模原分館保存庫の消火設備はハロゲンガス消火設備を設置。

5. 防犯

(1) フィルムセンターは、各階毎の機械警備(昼夜)の導入により、防犯を実施。

(2) 相模原分館は、各棟毎に機械警備(昼夜)の導入により、防犯を実施。

6. 収蔵スペースの確保について

平成16年度に、相模原分館に隣接する旧淵野辺キャンプの跡地の利用について、相模原市に対し要望を提出した。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

映画フィルムは化学的に脆弱なため、専用の保存庫を備えるフィルムセンター相模原分館において24時間、恒温恒湿の状態での保存している。具体的には、寄託映画フィルムを中心とした地下1階は室温10 ± 2℃、相対湿度40% ± 5%に設定し、原版フィルムを含む所蔵映画フィルムの収納庫がある地下2階は室温5 ± 2℃、湿度40% ± 5%に設定して保存している。また、アセテート・ベースのフィルムに顕著な劣化現象である「ビネガー・シンドローム」に侵されたフィルムについては、独立の空調設備を備え、室温2 ± 2℃、湿度35% ± 5%に設定された専用室において保存しているため、フィルム素材の所蔵品については、問題ないと考えている。

また、相模原分館からのフィルムの出入庫に関しては、外気温度との格差による結露等を防止するため、ならし室で2～4日程度(季節により所要日数が変化する。)調整した上で搬出している。フィルムセンターと相模原分館との間のフィルム運送については、保存庫と同様に1缶ずつ収納できる棚を設けたキャスター付きの台車(1台当たり2,000フィート缶40缶収納)を、美術品専用車両で運搬している。

映画関係資料については、前年度にスチル写真用のガラス乾板を整理・保存するため、相模原分館のフィルム保存庫内に専用の保管スペースを確保し、収納した。

【見直し又は改善を要する点】

映画フィルム

前年度末に、ここ数年急増している寄贈フィルムの収納場所確保のため、保存庫内のフィルムの大幅な移動を行わざるを得なくなった。映画フィルムの保存については万全を期しているが、素材が化学的に脆弱なフィルムは、定期的・集中的な保存調査が望ましいとされている。昭和62年の収蔵開始以来、18年を経過していることもあり、今回の移動を期に、収蔵フィルムの遡及的な保存調査に着手したが、その後も新規に収蔵する映画フィルムが大量に増加しており、十分な調査が行い難い状況が続いている。今後、この点に関して体制整備を行っていく必要がある。

映画資料

映画関係資料の大部分は、フィルムセンターにある温湿度の管理された専用の収蔵庫内で管理されているが、新規収蔵資料の増加が著しいため、今後はスペースの確保が問題となると予想している。とりわけ撮影機や映写機などの映画機材類は、相模原分館内の空きスペースに保管しているのが現状で、その長期的保存のためには、専用のスペースを確保することが急務である。

(3) 修理の状況

中期計画

- (3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。
緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。
伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。
- (3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。

実績

- | | |
|--|-------------------------------|
| 1 . 映画フィルム洗浄 | 22作品(所要経費:647,198円) |
| 映画フィルムデジタル復元 | 3作品(所要経費:19,750,754円) |
| (「國土無双」(1932年 伊丹万作監督)、「瀧の白糸」(1933年 溝口健二監督)[部分復元]、「新・平家物語」(1955年 溝口健二監督)の3作品) | |
| 2 . 修理の記録 | |
| 洗浄を実施した映画フィルムに関しては、所蔵作品データベース上へ記録を行った。 | |
| 3 . 修理費 | 予算額34,415,000円 決算額20,397,952円 |

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

フィルムセンターにおいて「収蔵品の修復」とは、映画フィルムの「修復・復元」を意味する。これは、1本しか所蔵していないプリント、もしくは状態の不安定なプリントから、ネガ、マスター等の保存用フィルムを作成し、そこから上映用プリントを複製するものであり、現像会社の技術者との緊密な協力の下に、フィルムの化学的な側面と映画作品の内容的な側面を精査しつつ行っている。また、修復・復元に当たっては、近年技術発達の著しいデジタル技術を修復作品の特性に応じて有効に活用している。

【見直し又は改善を要する点】

収蔵している映画フィルムの洗浄(クリーニング)については、「保管の状況」の「自己点検評価」に掲げたとおり、遡及的なフィルムの保存調査が殆ど行えない状況であるため、収蔵フィルム全てに対しての速やかな実施は困難である。

また、経費的な面からは洗浄する映画フィルムの本数に限りがあるため、今後は収蔵フィルムの中で優先順位を決定した上で、計画的に実施していく必要がある。

デジタル技術を活用した修復・復元技術については、まだ実験的な点が多く、今後とも調査検討を重ねる必要があるが、併せてデジタル媒体での保存についても調査することが重要と考える。

【計画を達成するために障害となっている点】

所蔵フィルムのデジタル媒体への複製は、特にニュース映画、文化・記録映画などの有効活用のためには有用な手段であり、著作権保護期間が満了しているもの(映画の場合公表後50年とされていたが、2004年1月1日から公表後70年に延長されることとなった。)を中心に行っていく。ただし、法的には著作権の認められないものであっても、わが国の映画界では「パブリック・ドメイン」という認識が必ずしも成熟していないため、DVD等によって積極的な普及を図るに当たっては、権利関係を綿密に追跡調査した上で、旧著作権者との合意を慎重に形成する必要がある。そうした権利問題を専門的に調査する人員を確保できないことが大きな障害となっている。

* 添付資料

修理した映画フィルム件数の推移(事業実績統計表 p.3)

修理した映画フィルムの一覧(事業実績統計表 p.41)

2. 公衆への観覧

(1) 展覧会・企画上映等の状況

中期計画

(1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。

(1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。

(1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。

(東京国立近代美術館)

フィルムセンター 年5～6番組程度

(1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。

(1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。

(1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。

なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。

また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。

(3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

実績(総括表)

1. 企画上映等 8番組(中期計画記載回数:年5～6番組)

(企画上映)

「キューバ映画への旅」

「日本アニメーション映画史」

「映画女優 高峰秀子」

「特集・逝ける映画人を偲んで 2002 - 2003」

「シネマの冒険 闇と音楽 アメリカ無声映画傑作選」

「フィルムは記録する2005:日本の文化・記録映画作家たち」

(共催上映)

「アジア映画 “豊穡と多様”」

「第5回東京フィルメックス 特集上映 内田吐夢監督選集 映画真剣勝負」

2. 展覧会 2回

「造形作品でみる 岡本忠成 アニメーションの世界」展

(併設:「展覧会 映画遺産 - 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより」展)

「映画女優 高峰秀子 展」

(併設:「展覧会 映画遺産 - 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより」展)

3. 入館者数 103,754人(目標入館者数82,000人/当初72,500人)

上映会 90,865人

(対前年度実績比 90.86%、目標入館者数72,500人/当初63,000人)

(平成15年度実績/入館者数:100,010人、上映日数:280日、上映回数:621回)

目標入館者数は、過去に行った同種企画上映の1回当たりの平均入館者数を参考として開催回数を乗じて算出。

展覧会 12,889人(対前年度実績比 119.35%、目標入館者数 9,500人)

(平成15年度実績/入館者数:10,799人、開催日数:255日)

目標入館者数は、過去に行った同種展覧会の1日当たりの平均入館者数を参考として開催日数を乗じて

算出。

4. 優秀映画鑑賞推進事業 168会場(目標会場数130会場以上)

5. 地方における共催上映

「巨匠たちの幻の映画～東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクション～」

(福岡市総合図書館:平成16年4月28日から5月5日まで/入館者数1,398人)

6. 上映会開催経費 予算額 71,202,000円 決算額 66,834,162円

7. 特記事項

上映スケジュールの策定は、フィルムセンターが所蔵している作品を基に行っているが、平成16年度に新たに収集した作品を含めて実施することで企画内容の充実が図れる。このため、上映日数及び回数を増加する等の調整の必要が生じ、「映画女優 高峰秀子」及び「逝ける映画人を偲んで」の両企画上映の開催上映日数を変更することになり、結果として、当初の上映会の入館目標数(63,000人)を10,000人近く増加した72,500人を目標数とした。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成16年度は、小津安二郎、カール・ドライヤー、市川崑といった世界的な作家の特集が衆目を集めた前年度の番組に比べ、一般的な意味では地味な印象を与える上映企画ではあるが、映画へのさまざまな視点に対応できるきわめて多様な番組を実現できたと考える。

フィルムセンター初のキューバ映画特集、日本アニメーション史を通観する、あるいは大女優高峰秀子の映画人生を回顧する、共にこれまでに比してもっとも多くの作品による連続上映、さらに新たに国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の会員ともなった福岡市総合図書館映像資料課との共催で実施した大規模なアジア映画特集、早川雪洲の主演作をはじめ、大スクリーン、ピアノ生伴奏付きでの鑑賞機会が稀有な多くのアメリカ無声映画の上映、70年代以降の先鋭的で野心的な記録映画群をわかりやすく系統立てて上映する企画など、何れも観覧者の好評を得ることができた公開事業となった。

また、前年度に経費的な関係から共催上映でのみ1日3回上映の実施を試行したが、平成16年度は企画上映である「映画女優 高峰秀子」及び「逝ける映画人を偲んで」の2企画で土曜日・日曜日・祝日に1日3回の上映を試みた。

映画祭「東京フィルメックス」との共催は平成16年度も継続したが、それに加えて、上記の福岡市総合図書館映像資料課と、上映企画「巨匠たちの幻の映画～東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクション～」を、同図書館映像ホールを会場に開催した。これは国内のFIAF会員との共同主催事業という点で今後の新しい展開に繋がるものとなった。

一方、展示においては、上映事業と関連した展覧会(2企画)の実施や東京都現代美術館と広報の面で連携できたことにより、目標入館者数を大幅に上回ることができた。

【見直し又は改善を要する点】

平成16年度は、企画の内容、質はともかく、前年度に比べて派手さが足りない感があったためか、上映では、結果として、年間入場者数のわずかな減少を招くこととなった。立案の段階では、一方で芸術的、歴史的、文化的な視点を重視しながら、嗜好の異なる多様な観客層を想定し、一年を通して広く国民に親しまれる番組編成をめざしているが、時として重点を置く観客層の予想が外れたり、それによって広報の方向性も間違っていた事象も起きた。

平成16年度の場合、例えば「映画女優 高峰秀子」が中高年層の人気を得ることは想定の内であったが、「日本アニメーション映画史」が、数の上で多くの若者、とりわけ“アニメ”ファンを惹きつけるとの予想は当たらなかった。アニメ・ファンが、今日のアニメーションのみならず、アニメーションの歴史にも興味を持つような、あるいは若者のアジア・ブームが「アジア映画 “豊穣と多様”」への注目に繋がるような、戦略的広報の在り方を模索していかなければならない。

* 添付資料

入館者数の推移 (事業実績統計表 p.4)

入場料収入の推移 (事業実績統計表 p.7)

企画上映「キューバ映画への旅」

方 針

日本とキューバの外交関係樹立75周年を記念して、駐日キューバ大使館などの協力を得て、ラテンアメリカを代表する映画大国の一つであるキューバの長篇映画12本、短篇記録映画6本およびショート・ショート・アニメーション集(2プログラム)を上映し、キューバの映画文化の総合的紹介を目指した。

実 績

1. 開催期間 平成16年4月6日～平成16年4月25日(18日間/36回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 等 協力:駐日キューバ大使館、キューバ国立映画芸術産業庁(ICAIC)、国際シネマ・ライブラリー
4. 上映作品数 20作品/15プログラム(1プログラム2～3回上映):延36回上映
5. 入館者数 4,590人(1回平均128人)(目標入場者数 3,500人)
6. 入場料金 一般500円、高校・大学生300円、小・中学生100円
7. 入場料収入 1,837,700円(目標入場料収入1,128,000円)
8. 担当した研究員数 4人
9. 講演会等 なし
10. 広報
 - ・印刷物(NFCカレンダー40,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
 - ・ホームページでの紹介
 - ・ラテン音楽専門のCDレコード店や音楽レーベル、サルサ・ダンスの専門誌、中南米諸国との友好団体、語学学校など、キューバ文化やラテンアメリカ文化の普及に携わる諸団体・企業と協力し、上映カレンダー配布やメールマガジン掲載の働きかけを行った。
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等
 - 朝日新聞(平成16年3月26日)、朝日新聞(平成16年3月27日)、朝日新聞(平成16年4月1日:夕刊)、公明新聞(平成16年4月2日)、しんぶん赤旗(平成16年4月2日)、THE JAPAN TIMES(平成16年4月2日)、東京新聞(平成16年4月6日:夕刊)、しんぶん赤旗(平成16年4月8日)、しんぶん赤旗(平成16年4月13日)、図書新聞(平成16年4月17日)、中央区fan4月号(平成16年3月19日)、ぱどNo.283(平成16年3月26日)、千葉ウォーカーNo.8(平成16年3月31日)、麻布時間vol.1(平成16年春)、SALSA 120% vol.65(平成16年3月)、週刊文春(平成16年4月8日)、月刊情況5月号(平成16年4月)、MUSIC MAGAZINE 6月号(平成16年6月)
12. アンケート調査
 - 調査期間 平成16年4月20日～平成16年4月25日(6日間)
 - 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
 - アンケート回収数 18件(母集団4,590件)
 - アンケート結果 ・良い61.1%(11件)・普通16.7%(3件)・悪い5.5%(1件)・無記入16.7%(3件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

上映フィルムの大半は日本で配給済のプリントであったが、そのほかにキューバ国立映画芸術産業庁(ICAIC)の協力により本国から無償で提供された記録映画の異才サンチアゴ・アルバレス監督の代表作、日本とキューバの初の合作『キューバの恋人』など、従前のキューバ映画上映の枠では紹介されてこなかった作品が加わり、プログラムにこれまでにない厚みが生まれた。また、駐日キューバ大使館の所蔵する、キューバ独自のデザインによる映画ポスターを上映会場で展示したことは、キューバの映画産業のオリジナリティを示す点でも大いに役立った。広報の面では映画ファンのみならず、ラテンアメリカ文化の愛好者層に深く浸透させることができた。

【見直し又は改善を要する点】

企画の詳細な実施内容が開催の約4か月前に決定となったため、キューバからの調達を予定していた作品が先に他で上映予定となっていたなど、作品選択に多少の制約が生じた。海外からの借用については、できる限り早期に交渉する必要がある。

企画上映「日本アニメーション映画史」

方 針

“漫画映画”の草創期である大正時代から、日本初の本格的な商業プロダクションである東映動画が軌道に乗る1960年前後までに製作された多様なアニメーション作品、そして1960年代後半から活躍を始め独自の地位を築いたアニメ作家・岡本忠成と川本喜八郎の作品、あわせて239本の国産アニメーション映画を作家別に上映し、日本アニメ史の類まれな豊かさを示すことを目指した。

実 績

1. 開催期間 平成16年7月6日～平成16年8月29日(48日間/96回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共催等 なし
4. 上映作品数 239作品/30プログラム(1プログラム2～3回上映):延96回上映
5. 入館者数 10,191人(目標入場者数 5,000人)
6. 入場料金 一般500円、高校・大学生300円、小・中学生100円
7. 入場料収入 4,082,200円(目標入場料収入1,611,000円)
8. 担当した研究員数 5人
9. 講演会等 なし
10. 広報
 - ・ 印刷物(NFCカレンダー55,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
 - ・ ホームページ
 - ・ ほぼ同時期に展示企画「日本漫画映画の全貌」を実施した東京都現代美術館との間で、上映カレンダー配布やポスター掲示などの相互協力を行った。また、上映カレンダーに初めて広告(紀伊國屋書店の国産アニメーション作品集DVD)を掲載し、広報経費を減少させることができた。
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等
公明新聞(平成16年6月11日)、産経新聞(平成16年6月20日)、毎日新聞(平成16年6月23日:夕刊)、定年時代(平成16年7月1日)、高知新聞(平成16年7月2日)、朝日新聞(平成16年7月3日:夕刊)、信濃新聞(平成16年7月8日:夕刊)、図書新聞(平成16年7月10日)、埼玉新聞(平成16年7月10日)、奈良新聞(平成16年7月10日)、下野新聞(平成16年7月12日)、しんぶん赤旗(平成16年7月16日)、ぽど中央区・江東区西エリアNo.795(平成16年6月25日)、芸術新潮7月号(平成16年6月)、Pooka 絵本工房7月号(平成16年6月号)、Weeklyぴあ(平成16年7月5日)、STUDIO VOICE Vol.343(平成16年7月)、中央区fan35号(平成16年7月9日)、シネフロント6月号(平成16年)、hanako No.795(平成16年7月21日)、沼津市生涯学習情報紙「さんさんだより8月号」(平成16年7月28日)、なぎさ8月号(平成16年8月1日)、Tokyo Walker No.24(平成16年8月17日)
12. アンケート調査
調査期間 平成16年8月24日～平成16年8月29日(6日間)
調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 192件(母集団10,191件)
アンケート結果 ・良い88.0%(169件)・普通6.3%(12件)・悪い0.0%(0件)・未記入5.7%(11件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

フィルムセンターの所蔵する1960年前後までのアニメーション作品のほとんどを上映することで、アーカイブとしての深みを来場者に強く印象付けるとともに、これを機会に上映用フィルムが1本しかない作品の複製を行うなど、この分野の映画の保存態勢の強化にもつながった。また、展示企画「造形作品でみる岡本忠成アニメーションの世界」との連動により立体感のある企画となり、夏休み期間の児童・生徒の来場にも結びついた。さらに作品の調達や上映を通じて、作家の関係者や遺族とのつながりが生まれ、今後の国産アニメ史研究にも寄与することとなった。

【見直し又は改善を要する点】

カタログは作成しなかったが、極めて貴重な上映機会であっただけに、来館者よりしばしばカタログ作成の要望が寄せられた。今後は、予算措置や人的な措置を行った上で、上映に伴う刊行物の充実を図りたい。

企画上映「映画女優 高峰秀子」 方 針

天才子役を皮切りに少女スター、そして日本映画の黄金時代を代表する大女優へと飛躍し、日本映画史と昭和史を共に体現した女優・高峰秀子の50年にわたる業績を振り返り、その出演作品82本とメイキング作品1作品の計83作品を2部に分けて上映することで、国民的女優の全体像に迫る企画を目指した。

実 績

1. 開催期間 平成16年9月3日～平成16年11月19日(67日間/158回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共催等 なし
4. 上映作品数 83作品/81プログラム(1プログラム2回上映):延158回上映
5. 入館者数 34,187人(目標入場者数 23,500人)
6. 入場料金 一般500円、高校・大学生300円、小・中学生100円
7. 入場料収入 13,327,000円(目標入場料収入6,443,000円)
8. 担当した研究員数 5人
9. 講演会等 なし
10. 広報
 - ・ 印刷物(NFCカレンダー第1期40,000枚、第2期43,500枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
 - ・ ホームページ
 - ・ 高峰氏の伝記を執筆し、現在公の場には姿を現さない同氏の代理人の協力を得て、「週刊文春」「いきいき」「キネマ旬報」などに大きな紹介記事を掲載することができた。
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等
日本経済新聞(平成16年8月7日:夕刊)、定年時代(平成16年8月下旬号)、産経新聞(平成16年8月25日)、朝日新聞(平成16年8月28日)、東京新聞(平成16年8月31日:夕刊)、読売新聞(平成16年9月3日:夕刊)、信濃新聞(平成16年9月16日)、茨城新聞(平成16年9月16日)、上毛新聞(平成16年9月16日)、下野新聞(平成16年9月16日)、しんぶん赤旗(平成16年10月14日)、日本経済新聞(平成16年11月8日)、シネフロント328号(平成16年8月15日)、ぱど中央区・江東区西エリアNo.803(平成16年8月27日)、FREEMODE vol.04(平成16年9月8日)、週刊文春(平成16年9月9日)、日刊「協同組合通信」No.15113(平成16年9月9日)、いきいき10月号(平成16年9月10日)、キネマ旬報No.1415(平成16年10月)、VOGUE NIPPON No.63(平成16年10月)、婦人画報No.1216(平成16年10月)、Weeklyぴあ(平成16年10月8日)、なぎさ11月号(平成16年11月1日)、いきいき11月号(平成16年10月)、日本カメラ12月号(平成16年11月)
12. アンケート調査
調査期間 平成16年11月13日～平成16年11月19日(6日間)
調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 115件(母集団34,187件)
アンケート結果 ・良い67.0%(77件)・普通1.7%(2件)・悪い0.9%(1件)・未記入30.4%(35件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

上映作品には著名な代表作を配する一方、配給会社との交渉により劇場公開以来ほとんど上映されることのなかった貴重な作品を多数加えたことで、ノスタルジーを喚起するにとどまらない、未知の映画を発見する映画アーカイブとしての実力を見せることができた。また、展示企画「映画女優 高峰秀子展」を同時開催したこと、出演作品のポスターを上映会場で展示したことで、昭和の文化史を飾るキャラクターとしての高峰秀子像をも十全に演出することができた。

【見直し又は改善を要する点】

とりわけ知名度の高い一部の作品については、会場整理に支障が生じるほどの混雑となり、満席時には多くの来館者に入場を断らなければならぬ状況となった。作品による上映回数の調整などを今後は検討したい。

企画上映「特集・逝ける映画人を偲んで 2002 - 2003」

方 針

日本映画界にそれぞれの足跡を残し逝去した映画関係者の業績をその代表作で偲び、回顧するフィルムセンターの恒例企画である。今回は2002年1月1日から2003年12月31日までの期間に亡くなった監督、俳優、技術スタッフなどを対象とした。深作欣二、蔵原惟繕、松田定次、清川虹子、団令子、水木洋子、笠原和夫の各氏をはじめ、約70名の映画人の携わった63作品・57番組を上映することで、その逝去を惜しむとともに日本映画史の厚みを示そうとする企画である。

実 績

1. 開催期間	平成16年12月7日～平成16年12月26日 平成17年1月18日～平成17年2月20日(48日間/114回)
2. 会 場	東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催	なし
4. 上映作品数	63作品/57プログラム(1作品2回上映):延114回上映
5. 入館者数	17,735人(目標入場者数 19,000人)
6. 入場料金	一般500円、高校・大学生300円、小・中学生100円
7. 入場料収入	7,002,400円(目標入場料収入4,510,000円)
8. 担当した研究員数	4人
9. 講演会等	なし
10. 広報	・ 印刷物(NFCカレンダー42,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ ホームページ
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等	図書新聞(平成16年10月23日)、しんぶん赤旗(平成16年12月2日)、文化庁月報No.434(平成16年11月号)、なごさ12月号(平成16年12月1日)、hanako No.816(平成16年12月22日)、中央区タウンHP(平成16年11月2日)
12. アンケート調査	調査期間 平成17年2月15日～平成17年2月20日(6日間) 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。 アンケート回収数 289件(母集団17,735件) アンケート結果 ・良い77.8%(225件)・普通13.4%(39件)・悪い2.4%(7件)・未記入6.2%(18件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本企画「逝ける映画人を偲んで」は、かねてより、著名監督や俳優に限定されない幅広い映画人を追悼することで定評があり、フィルムセンターの存在を広く周知することにも貢献してきた。長命の大ベテランも夭折した映画人も逝去の時期が近いという理由で同時に扱われるという性格を持つため、バラエティと意外性に富むラインアップが生まれ、映画ファンにフィルムセンター企画の視野の幅広さを印象付ける効果も生まれた。

【見直し又は改善を要する点】

上映期間が、途中で「シネマの冒険 闇と音楽」をはさんで2期に分かれた。このことに、情報の混乱をきたす来館者が少数いたほか、第2期になると企画開催中の印象が薄くなったため、入館者数がやや低下する現象も起きたので、今後は可能な限り会期の連続性を保持したい。

特別企画上映「シネマの冒険 闇と音楽 アメリカ無声映画傑作選」 方 針

「シネマの冒険 闇と音楽」は、国内外の無声映画の秀作に音楽のライブ演奏を付して上映する毎年恒例の企画である。今回はアメリカ無声映画の秀作15本(長篇11本、短篇4本)を選び、アメリカを代表する無声映画の伴奏ピアニスト、フィリップ・カーリ氏を招聘してすべての上映に生演奏を付し、クラシックな名作に新たな魅力を加えることを目指した。

実 績

1. 開催期間 平成17年1月5日～平成17年1月16日(11日間/22回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 なし
4. 上映作品数 15作品/11プログラム(1作品2回上映):延22回上映
5. 入館者数 2,850人(目標入場者数 3,000人)
6. 入場料金 一般1,000円、高校・大学生800円、小・中学生600円
7. 入場料収入 2,483,000円(目標入場料収入483,000円)
8. 担当した研究員数 4人
9. 講演会等 なし
10. 広報
 - ・ 印刷物(NFCカレンダー25,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
 - ・ ホームページ
 - ・ 首都圏にある音楽大学の研究室など、クラシック音楽の演奏家および愛好者層に重点的に上映カレンダーを配布した。また、音楽雑誌とも緊密な連携を取り、伴奏ピアニストへのインタビュー記事が実現した。
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等
日本経済新聞(平成16年12月20日:夕刊)、THE JAPAN TIMES(平成16年12月24日)、朝日新聞(平成17年1月6日:夕刊)、しんぶん赤旗(平成17年1月13日)、月刊ピアノ(2005.1月号)、ムジカノーヴァ(2005.1月号)、CGワールド(2005.2月号)、なぎさ1月号(平成17年1月1日)
12. アンケート調査
調査期間 平成17年1月11日～平成17年1月16日(6日間)
調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 174件(母集団2,850件)
アンケート結果 ・良い87.9%(153件)・普通4.0%(7件)・悪い1.2%(2件)・未記入6.9%(12件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

日本人でありながら最初のハリウッド・スターの一人となった早川雪洲に脚光をあてたことは、初期アメリカ映画の複雑な歴史を示す上で興味深いものとなった。また、フィリップ・カーリ氏の高い即興演奏能力が十分に発揮され、魅力的な上映となった。

【見直し又は改善を要する点】

予想よりやや少ない入館者数となった。今後は企画の構成や開催時期、広報の方法などを再検討する。

企画上映「フィルムは記録する2005：日本の文化・記録映画作家たち」 方 針

これまで1997年、1998年、2001年の3回の企画で日本のノンフィクション映画の系譜を追ってきた「フィルムは記録する」シリーズの最終回として、1970年代以降に製作されたノンフィクションの秀作55本を作家別、製作会社別に上映し、社会の激しい変化、科学技術の発展、人々の生活等を、機敏に捉えた近過去の記録映画のインパクトを示そうとしたものである。

実 績

1. 開催期間	平成17年2月22日～平成17年3月27日(30日間/60回)
2. 会 場	東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催	なし
4. 上映作品数	55作品/30プログラム(1プログラム2回上映):延60回上映
5. 入館者数	6,050人(目標入場者数 5,000人)
6. 入場料金	一般500円、高校・大学生300円、小・中学生100円
7. 入場料収入	2,378,600円(目標入場料収入1,772,000円)
8. 担当した研究員数	3人
9. 講演会等	なし
10. 広報	<ul style="list-style-type: none"> ・ 印刷物(NFCカレンダー40,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ ホームページ ・ 社団法人映像文化製作者連盟、ドキュメンタリー映画関係者など、文化・記録映画との関連の深い組織・個人に届くよう綿密なリストを作成した上で上映カレンダー配布を行った。
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等	<p>公明新聞(平成17年1月14日)、朝日新聞(平成17年1月27日)、東京新聞(平成17年2月1日:夕刊)、 図書新聞(平成17年2月5日)、中央公論(2005.3月号)、日本経済新聞(平成17年2月14日:夕刊)、信 濃毎日新聞(平成17年2月17日:夕刊)、茨城新聞(平成17年2月17日)、上毛新聞(平成17年2月17 日)、週刊金曜日(2005.2.18:545号)、新潟新聞(平成17年2月21日:夕刊)、しんぶん赤旗(平成17 年3月3日)、民映研通信:初声の号(平成17年1月1日)、東京カレンダー(2005年3月号)、中央公論(200 5年3月号)、情況(2005年3月号)、なぎさ3月号(平成17年3月1日)、Weeklyぴあ(平成17年3月3日)、 Weeklyぴあ(平成17年3月10日)、中央区タウンHP(平成17年2月8日)</p>
12. アンケート調査	<p>調査期間 平成17年3月22日～平成17年3月27日(6日間) 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。 アンケート回収数 157件(母集団6,050件) アンケート結果 ・良い77.0%(121件)・普通10.1%(16件)・悪い12.5%(4件)・未記入10.0%(16件)</p>

自己点検評価

<p>【良かった点、特色ある取組み】</p> <p>「フィルムは記録する」シリーズにおける特徴として、企画の準備段階や上映期間中に映画作家やスタッフと直接交流する機会の多さが挙げられ、このことが日本の文化・記録映画に関する研究を促進する結果となっている。そうした交流を通して、映画アーカイブとしてのフィルムセンターについて理解を得ることで、実際にネガ原版が寄贈されるケースも複数現れている。また、ドキュメンタリーへの関心が高まっている近年の状況を反映して、若年層を主とする新たな観客層を得ることができたのも注目すべき点である。</p> <p>【見直し又は改善を要する点】</p> <p>上映作品のスタッフが頻繁に来場する企画であるため、今後はそうした機会を利用してトークや舞台挨拶などのイベント面を充実させることも検討したい。</p>

共催上映「アジア映画 “豊穡と多様”」 方 針

アジア諸国の映画の収集・保存を大きな特色とし、2004年には国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)に加盟した福岡市総合図書館との共催により、東南アジア・南アジア諸国の名作54本を上映し、各国の豊穡な映画文化の紹介を狙いとした企画である。うち41本は同図書館所蔵のフィルムである。

実 績

1. 開催期間 平成16年4月27日～平成16年6月27日(54日間/108回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共催等 共催:福岡市総合図書館
4. 上映作品数 54作品/54プログラム(1作品2回上映):延108回上映
5. 入館者数 10,812人(目標入場者数 11,000人)
6. 入場料金 一般500円、高校・大学生300円、小・中学生100円
7. 入場料収入 4,403,500円(目標入場料収入3,544,000円)
8. 担当した研究員数 2人
9. 講演会等 なし
10. 広報
 - ・印刷物(NFCカレンダー40,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
 - ・ホームページ
 - ・アジア情報専門の雑誌やミニコミやウェブサイト、駐日各国大使館などに重点的に情報を提供したほか、当該国の言語を教える学校・講座、各国の専門料理店などにも上映カレンダーを配布した。
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等
 - 読売新聞(平成16年4月9日:夕刊)、REAL TOKYO HP(平成16年4月30日)、KAIBIGAN No.155(平成16年5月1日)、Malaysia Times(平成16年5月1日)、SUMAI TIMES(平成16年5月1日)、SH WE BAKER(平成16年5月1日)、NUANSA INDONESIA MEDIA(平成16年5月1日)、しんぶん赤旗(平成16年5月13日)、朝日新聞(平成16年5月17日:夕刊)、公明新聞(平成16年5月28日)、月刊インドネシア3月号(平成16年)、なぎさ6月号(平成16年6月1日)
12. アンケート調査
 - 調査期間 平成16年6月22日～平成16年6月27日(6日間)
 - 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
 - アンケート回収数 185件(母集団10,812件)
 - アンケート結果 ・良い82.7%(153件)・普通14.6%(27件)・悪い0.5%(1件)・未記入2.2%(4件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

インド映画の上映は過去にも実施したが、東南アジア・南アジアの映画を総合的に上映したのはフィルムセンターでは初めての試みである。福岡市総合図書館との緊密な連携のもと、権利処理やフィルム輸送もスムーズに進められ、順調な準備をすることができたほか、上映カレンダーの執筆を長年アジア映画の上映に携わってきた石坂健治氏(国際交流基金)に依頼し、専門家の知識を活用できた。この企画は国内で2機関目の国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)加盟機関となった同図書館のフィルム発掘・復元の成果を東京で啓蒙する機会ともなり、今後さらに協力関係を深めていくための足がかりとなった。

【見直し又は改善を要する点】

ベトナム、マレーシアなど、日本における映画の知名度が低い国の作品には多くの来場者を集められなかった。今後は上映回数の調整などを検討したい。

共催上映「第5回東京フィルメックス 特集上映 内田吐夢監督選集 映画真剣勝負」

方 針

第5回東京フィルメックスとの共催企画として、巨匠内田吐夢監督の代表作13本を上映する企画である(うち1本は有楽町朝日ホールでも音楽伴奏つきで上映)。すべての作品に英語字幕を付し、初日には若手映画作家によるトークイベントも行うことで、新たな観客層の掘り起こしも狙った。

実 績

1. 開催期間 平成16年11月20日～平成16年11月28日(8日間/24回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 共催:特定非営利活動法人東京フィルメックス実行委員会
4. 上映作品数 13作品/13プログラム(1プログラム1～2回上映):延24回上映
5. 入館者数 4,450人(目標入場者数 2,500人)
6. 入場料金 一般500円、高校・大学生300円、小・中学生100円
7. 入場料収入 1,742,300円(目標入場料収入805,000円)
8. 担当した研究員数 4人
9. 講演会等 なし
10. 広報 ・印刷物(上映ちらし80,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
・ホームページ
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等
時代劇マガジン 2004VOL.9(平成16年10月6日)、CUT 2004.11No.172(平成16年10月19日)、CDジャーナル 2004November(平成16年10月20日)、プレミア日本版 12月号(平成16年10月20日)、朝日新聞(平成16年10月29日:夕刊)、定年時代 平成16年11月下旬号(平成16年11月15日)、シネ・フロント 2004年11月号(平成16年11月15日)、しんぶん赤旗(平成16年11月18日)、朝日新聞(平成16年11月20日)、日本経済新聞(平成16年11月20日:夕刊)、メンズダイジェスト首都圏版 通巻11号(平成16年11月22日)、週刊文春 11月25日号(平成16年11月25日)、Weeklyぴあ(平成16年11月25日)、図書新聞(平成16年11月27日)、キネマ旬報11月下旬号 2004No.1417(平成16年11月15日)、キネマ旬報12月上旬号 2004No.1418(平成16年12月1日)、しんぶん赤旗(平成16年12月28日)
12. アンケート調査
調査期間 平成16年11月20日～平成16年11月28日(8日間)
調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 269件(母集団4,450件)
アンケート結果 ・良い77.7%(209件)・普通5.2%(14件)・悪い0.7%(2件)・未記入16.4%(44件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】
昨年度の東京フィルメックスとの共催企画「清水宏 生誕100年」の好評を踏まえ、入場料を500円に下げたこと、それと関連して会場を小ホールから大ホールに移したことが功を奏した。また、同映画祭の主要な観客である若年層の映画ファンを、こうした黄金時代の名作に惹きつけたことも共催の大きな意義と思われる。有楽町朝日ホールでの上映では、気鋭のミュージシャン大友良英氏のグループによる演奏が付され、あわせて内田吐夢再発見の好機となった。東京フィルメックスには多くの外国の映画上映関係者が参加することや、上映された全作品に英語字幕が付されているため海外映画祭で特集が組まれやすいことから、本企画で上映されたプリントが第34回ロッテルダム映画祭(平成17年1月26日～2月6日)等で上映されるなど、その後の海外展開にもつながっている。

【見直し又は改善を要する点】

内田監督の御遺族との連絡が一部不十分であった。今後はフィルメックス側との協議のもと、とりわけこうした回顧企画については御遺族や関係者との連絡を徹底する。

「造形作品でみる 岡本忠成アニメーションの世界」展(併設:「展覧会 映画遺産」展)

方 針

本展は、「花ともぐら」(1970年)や「おこんじょうり」(1982年)など手作りのアニメーション作品で知られる岡本忠成のユニークな世界を、実際の映画製作で用いられた造形作品の数々を通して紹介する試みであり、開催に当たりエコー社と人形作家・保坂純子氏の協力を得て、300点あまりの人形やセル画を展示することにより、一作ごとに全く異なる表現様式に挑むという世界的にも類例を見ないアニメーション作家の魅力に迫ろうとしたものである。

なお、本展にあわせ7月から8月にかけては、上映企画「日本アニメーション映画史」「こども映画館」で岡本忠成作品の連続上映を行うとともに、子ども向けにガイドツアーの開催やセルフガイドの配布を試み、子どもたちの鑑賞機会や理解の促進にも配慮した。

実 績

1. 開催期間 平成16年4月6日～平成16年6月27日 / 平成16年7月6日～平成16年8月29日(120日間)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室
3. 共 催 等 特別協力:株式会社エコー / 協力:保坂純子、株式会社櫻映画社
4. 出品点数 企画展「造形作品でみる 岡本忠成アニメーションの世界」 25件
(「展覧会 映画遺産」展 198件)
5. 入館者数 5,897人(目標入場者数 4,000人)
6. 入場料金 個人 / 一般200円、大学生70円、高校生40円、小・中学生無料
団体 / 一般100円、大学生40円、高校生20円、小・中学生無料
7. 入場料収入 476,500円(目標入場料収入481,000円)
8. 担当した研究員数 1人
9. 講演会等 なし
10. 広報 ・印刷物(ポスター1,000枚、チラシ40,000枚)の各美術館・生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
・ホームページ
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等
ばど:中央区・江東区西エリア(平成16年4月9日)、公明新聞(平成16年4月30日)、REAL TOKYO HP(平成16年4月30日)、Cabinet No.50(平成16年5月1日:夕刊)、朝日新聞(平成16年5月14日:夕刊)、My SEASON 2004.6(平成16年5月20日)、Directors MAGAZINE(平成16年6月1日)、足立朝日(平成16年6月1日)、中央区fan 35号(平成16年7月9日)、図書新聞(平成16年7月10日)、しんぶん赤旗(平成16年7月16日)、朝日新聞(平成16年7月22日:夕刊)、hanako No.795(平成16年7月21日)、「BM - 芸術の杜」2004.Vol.01 SUMMER(平成16年7月25日)、東京国際映画祭メールマガジン(平成16年8月25日)、Tokyo Walker No.24(平成16年8月)、小学三年生(2004.8月号)
12. アンケート調査
調査期間 平成16年4月20日～平成16年4月25日(6日間)
平成16年6月22日～平成16年6月27日(6日間)
平成16年8月24日～平成16年8月29日(6日間)
調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 123件(母集団5,897件)
アンケート結果 ・良い81.3%(100件)・普通13.0%(16件)・悪い2.4%(3件)・未記入3.3%(4件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】
2002年の開室以来、当展示室としては初めて、展示品の大部分を外部から借用して開催した本展は、岡本忠成監督に関する展示イベントとしては初めての本格的な催しとなった。岡本作品の現場で実際に用いられたオリジナル素材を展示施設で一堂に公開する試みも初めてのことであり、映画プロダクションやスタッフ＝権利者との協力による新たな展示企画の可能性をも示している。開催に当たってはエコー社と人形作家・保坂純子氏の協力を得て、荒々しい木彫りの人形を使った「おじいちゃんが海賊だった頃」(1968年)から張り子の質感を生かした「おこんじょうり」まで、300点あまりの人形やセル画を展示することができた。また、完成作品のクリップや関係者の証言を集めた映像、監督自身の絵コンテなどを造形作品と対比させることで、アニメーション映画への理解を助ける工夫を行った。

上映企画と連動したガイドツアーなども好評を博した。小規模ながら権利者の許諾を得て販売用のグッズを制作したのも新しい試みである。

【見直し又は改善を要する点】

上映企画との連動や映像と造形作品との対比展示など、若年の観客層獲得へ向けて様々な工夫をしたものの、若年層の来館者数は予想を下回っている。今後は、広報的な戦略の見直しに加え、展示ケースを旧来のものよりも低く子ども目線に合わせるなどレイアウト上の工夫も必要と考える。

「映画女優 高峰秀子展」(併設:「展覧会 映画遺産」展) 方 針

本展は、高峰秀子氏の1929年の子役デビューから1979年の引退までの半世紀におよぶ国民的映画女優の業績を核としながら、一流の文化人たちとの交流やエッセイストとしての活躍など、しばしば映画という枠をも超えて展開されたその多彩な足跡を、150点以上に及ぶ展示品によってたどり、上映企画「映画女優 高峰秀子」にあわせて開催することで、上映作品と展示の両面からの立体的な理解や集客効果を狙ったものである。

開催にあたっては、未公開資料を含む貴重なコレクションをひろく一般に公開することと、商業広告から油彩画及び写真作品までを集め、多種多様な(メディア)そして(時代)の中の(高峰秀子像)を浮き彫りにしようとした。

なお、会期中にはギャラリートークを開催して、さらなる来館者の理解促進も目指した。

実 績

1. 開催期間 平成16年9月3日～平成16年11月28日 / 平成16年12月7日～平成16年12月26日 / 平成17年1月5日～平成17年3月27日(164日間)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室
3. 共 催 等 協力:株式会社秋山庄太郎事務所、財団法人川喜多記念映画文化財団、財団法人土門拳記念館、日本ドリームコンテンツ株式会社、株式会社マーランド、松下電器産業株式会社、明治製菓株式会社、森永製菓株式会社、株式会社リュウスタジオ、池田真魚、木村尚子、田沼武能
4. 出品点数 企画展「映画女優 高峰秀子展」 150件 (「展覧会 映画遺産」展 198件)
5. 入館者数 6,992人(目標入場者数 5,500人)
6. 入場料金 一般200円、シニア・大学生70円、高校生40円、小・中学生無料
7. 入場料収入 594,320円(目標入場料収入661,000円)
8. 担当した研究員数 2人(内、1名は客員研究員)
9. 講演会等 ギャラリートーク3回、参加人数計69人、講師:田中真澄(映画史家)
1回目:平成16年12月18日(土)午後1時～午後1時30分、聴講者数:16名
2回目:平成17年1月22日(土)午後1時～午後1時30分、聴講者数:29名
3回目:平成17年2月19日(土)午後1時～午後1時30分、聴講者数:24名
10. 広報 ・印刷物(ポスター1,850枚、チラシ40,000枚)の生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
・ホームページ
11. 上映会関連新聞・雑誌記事等
朝日新聞(平成16年8月28日)、読売新聞(平成16年9月3日:夕刊)、信濃毎日新聞(平成16年9月16日)、茨城新聞(平成16年9月16日)、下野新聞(平成16年9月16日)、日本カメラ12月号(平成16年12月1日)、Enjoy Tokyo(平成17年1月5日)、産経新聞(平成17年2月1日)、美術の杜Vol.03 2005年3月
12. (1)アンケート調査(展示)
調査期間 平成16年11月13日～平成16年11月19日(6日間)
平成17年2月15日～平成17年2月20日(6日間)
平成17年3月22日～平成17年3月27日(6日間)
調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 79件(母集団6,992件)
アンケート結果 ・良い77.2%(61件)・普通18.9%(15件)・悪い10%(0件)・未記入3.7%(3件)
- (2)アンケート調査(ギャラリートーク)
調査期間 平成16年12月18日・平成17年1月22日・2月19日
調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 15件(母集団69件)
アンケート結果 ・良い60%(9件)・普通%33.3(5件)・悪い10%(0件)・未記入0%(0件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

開催にあたっては、1985年に高峰秀子氏本人から川喜多記念映画文化財団へ寄贈された撮影台本や写真アルバムなどの資料を借用し、最初の出演作となった1929年(当時6歳)の野村芳亭作品「母」の撮影台本から1933年

(当時9歳)の五所平之助作品「十九の春」の撮影風景を記録した16mmフィルムまで、未公開資料を含む貴重なコレクションをひろく一般に公開することができた。さらに、映画関係資料にとどまらず森永製菓や明治製菓、松下電器産業などの商業広告から、高峰をモデルにした梅原龍三郎の油彩画(東京国立近代美術館所蔵)、木村伊兵衛や土門拳、早田雄二、秋山庄太郎たちの写真作品までを集め、旧来の映画関係資料にとどまらず広告から芸術作品まで、広い分野から展示品を集めたことで企画に厚みをもたらすことができた。

また、会期中に客員研究員の映画史家・田中眞澄氏によるギャラリートークを開催も好評を博した。

【見直し又は改善を要する点】

外部からの借用による展示品が増えたことに伴い、これまで接点の少なかった分野の著作者・権利者との調整に多くの時間を割かれる結果ともなった。使用料の交渉やクレジット上での扱い、借用品の扱いなど、今後はよりスムーズな対応が必要であるとする。

優秀映画鑑賞推進事業

方 針

「優秀映画鑑賞推進事業」は、文化庁とフィルムセンターが日本映画製作者連盟、全国興行環境衛生同業組合連合会などの協力のもと、全国各地の公立文化施設などと共同して、優れた日本映画の良質な35mmプリントを提供する巡回上映事業のプログラムである。平成16年度の上映作品は4作品1プログラム、全20プログラムで、親子が揃って楽しめる番組も4番組編成し、広く国民に優れた映画を鑑賞してもらう機会の提供を目指した。

実 績

1. 開催期間	平成16年7月2日から平成17年3月14日までの間
2. 会 場	福井県、徳島県、鹿児島県を除く全国44都道府県の168会場
3. 主 催	文化庁、東京国立近代美術館フィルムセンター
協 力	(社)日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会
そ の 他	各開催会場において協力等の団体あり
4. 出品点数	20プログラム(各4作品、計80作品)
5. 入館者数	入場者数計:83,901人
6. 入場料金	500円以内
7. 入場料収入	- 円
8. 担当した研究員数	2人
9. 広報	各実施会場で実施
10. アンケート調査	
調査期間	平成16年7月2日～平成17年3月14日
調査方法	アンケート用紙を配布し、集計されたものを各会場より回収する
アンケート回収数	16,385件
アンケート結果 (有効回答13,654件[83.3%]中)	
	・良い92.0%(12,566件)・普通6.4%(877件)・悪い1.6%(211件)
内 訳	一般プログラム13,943件(有効回答11,445件[82.1%]中)
	・良い91.4%(10,460件)・普通6.9%(790件)・悪い1.7%(195件)
	親子プログラム大人2,108件(有効回答1,884件[89.3%]中)
	・良い96.5%(1,819件)・普通2.7%(50件)・悪い0.8%(15件)
	親子プログラム子供334件(有効回答325件[97.3%]中)
	・良い88.3%(287件)・普通11.4%(37件)・悪い0.3%(1件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

観客層は60歳代を中心に中高年者が多く、上映される番組は、主に日本映画の古典的な名作や大ヒット作品が選ばれる傾向が強い。ただし、近年は映画祭や定期的な上映活動の一環として、特色のある作品を選んだり、地元ゆかりのある作品や映画人を顕彰したりする例も増えている。親子プログラムに対しては例年どおり、スクリーンで映画を見る楽しさを実感したという感想が多く寄せられた。

16回目となる平成16年度は、福井、徳島、鹿児島県の3県において開催がなかったため、全国44都道府県で実施したが、会場数は本事業始まって以来初の減少で、8会場減の全国168会場での実施となった。市町村合併や財政の緊縮といった情勢変化の影響が窺われた。なお、中越地震の影響で、新潟県十日町市での開催は会期直前にやむなく中止となった。一方、新規会場は41会場と例年並みの伸びを示しており、従来の公民館や市民ホールだけでなく、新規に開館した美術館やNPO法人運営による映画館などでも開催され、当該事業をめぐる環境の変化を窺わせた。しかしながら、期間中の入場者数は総計で83,901人にのぼり、これまでで最も多い入場者数となった。

【見直し又は改善を要する点】

当事業は、平均すると1都道府県当たり4会場弱の実績となっているが、現行の巡回システムでは、プリントが当方のチェックを経ないまま長期間会場を移動することに加え、新規実施会場にはフィルムの扱いに不慣れなところもあるため、プリントへのダメージから生ずる断裂など、上映に支障を生じるトラブルが起きる可能性がある。また、映画会社や地元の映画館との関係、都道府県の担当部署の取り組み方などにより、実施会場に偏りが生じることがある。そのため今後は、既

に定着して毎年継続して実施している会場より、新規に実施を希望する会場を優先することや、事前に各都道府県に開催希望数の制限を設けるなど、会場数の制約を検討せざるを得ない状況である。次年度は、改めてプリントのチェック体制を確認するとともに、文化庁の「日本映画・映像」振興プランによる上映支援事業などの進展を見すえつつ、今後の事業全体の見直しを視野に入れながら、番組編成を変更することにより会場からの希望をより正確に把握することで、実施内容についての検討を進めていきたい。

(2) 貸与・特別観覧の状況

中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

実績

貸与・特別観覧の件数

映画フィルム

貸与	39件(114本)
特別映写	90件(195本)
複製利用	38件(83本)

映画資料

貸与	4件(171点)
特別観覧	45件(243点)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

映画フィルム

国内外の主要映画祭や国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)加盟機関などを対象に、主に映画保存活動の啓発を目的として行われる所蔵フィルムの貸出は39件、その貸出フィルム数は114本に上り、前年度を10件、51本も上回る伸びを見せた。国外では、ミュンヘン映画博物館で当センターを特集する企画上映が生まれ、英語字幕付きプリント16本の貸与を行うとともに、東京フィルメックスとの共催で行った清水宏および内田吐夢特集の反響を受けて、ブリスベン国際映画祭、ロッテルダム国際映画祭、オーストリア映画博物館で組まれた特集上映に貸与を行った。国内では京都映画祭、横浜美術館などの企画上映に、多くのフィルムを貸与した。また、文化庁主催による韓国ソウルでの日本映画上映にも、13本の貸与を行った。貸与状況は以下の表のとおりである。

大学等の教育機関や研究機関、映画やテレビの制作会社、日本映像職能連合の加盟団体、出版社などの組織を対象に行われている特別映写は、90件が実施され、195本が上映された。また、テレビ番組の制作会社や著作権を持つ映画会社などに対し所蔵フィルムからの複製を認める複製利用は、件数として38件、フィルム本数としては83本であった。

映画資料

映画関係資料については貸与、出版物等への図版提供を下記のとおり行った。

展示施設等を対象とする貸与では、日本近代文学館で開催された「チェーホフ展」、森アーツセンターギャラリー9を会場とする第17回東京国際映画祭企画催事「映画大博物館」、世田谷文学館の「生誕100年 映画監督・成瀬巳喜男」、東京国際アニメフェア2005で開催された「特別功労賞」特別展に対し、映画ポスターや写真を中心とする関係資料計171点の貸与を行った。

出版や放送などに対しては海外からの申請1件を含め計48件の申請に対し、256点の図版提供や撮影の許可を行った(上映用フィルム貸与に伴う写真図版の提供を除き、資料複写3件13点を含む)。これらには雑誌復刻への原本提供や、映画会社による自社保存用スチル写真素材の作成、大学による大規模な資料の熟覧などが含まれている。また平成16年度は、東京都現代美術館で開催された「日本漫画映画の全貌」、野田市郷土博物館の「小津安二郎監督と野田」、横浜都市発展記念館の「映画生誕110年 シネマ・シティ 横浜と映画」など6件の企画展示で、出品のための資料の複製を許可した。

【見直し又は改善を要する点】

映画フィルム

映画フィルムの貸与及び複製利用にあたっては、保存の観点から出庫可能なフィルムであることを確認した上で、著作権者の出庫承諾を得て、その申請を受けているが、著作権者が不明な場合や、著作権者によっては許諾手続きが複雑な場合があり、結果として承諾を受けるのに相当時間を要することがある。これは、著作権者の権利保護のため避けられない面ではあるが、より迅速な貸出業務や複製利用許可を進めるにあたり、今後とも著作権者との間で許諾手続きについて検討を重ねていく必要がある。

映画資料

貸与や特別観覧による関係資料の公開は著作権を尊重しながら進めているが、映画ポスターやスチル写真の権利者や権利の保護期間については業界内でも解釈に幅があるため権利関係で紛争が起きないように慎重な対応が必要である。このため、コレクションの積極的な活用という観点から見たときに大きな足かせとなっていることに加え、業務の定型化による効率化を図ることが困難である。

また、新聞やテレビなどマスコミの場合は、申請から2、3日以内での素材提供を求めてくるケースが多いが、当館は申請から許可までの事務処理に約1週間を要するために申請を諦めるケースも一部で生じており、事務手続きの簡略化についての検討が必要である。

* 添付資料

貸与件数の推移（事業実績統計表 p.8）

特別観覧件数の推移（事業実績統計表 p.9）

3. 調査研究

中期計画

- (1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。
- 1 収蔵品に関する調査研究
 - 2 美術作品に関する調査研究
 - 3 収集・保管・展示に関する調査研究
 - 4 美術史、美術動向、作者に関する調査研究
 - 5 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等
- (1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。
- (2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

実績

1. 調査研究

(1) 収蔵品の調査研究

- ・日本のニュース映画の調査研究

(2) 展覧会のための調査研究

- ・キューバ映画に関する調査研究
- ・東南アジア・南アジア各国映画史に関する調査研究
- ・日本アニメーション史に関する調査研究
- ・女優高峰秀子に関する調査研究
- ・初期アメリカ無声映画に関する調査研究
- ・1970年代以降の日本の文化・記録映画に関する調査研究
- ・岡本忠成のアニメーション作品に関する調査研究

(3) 保存・修理に関する調査研究

- ・アジア諸国の映画保存、アーカイブについての調査研究
- ・アメリカにおける映画保存、アーカイブについての調査研究(国立公文書館、議会図書館)
- ・南アジア太平洋地域における映画保存、アーカイブについての調査研究
- ・デジタル技術を用いた映画フィルムの修復に関する調査研究
- ・ナイトレート・フィルムの保存と修復に関する調査研究
- ・1920年代ドイツ映画の保存と修復に関する調査研究(ドイツ・ミュンヘン映画博物館)

(4) 研究活動の活用等

当センターの調査研究の成果は、隔月で発行している「NFCニューズレター」に掲載した。NFCニューズレターは、大学等の研究機関、図書館等の団体と映画研究者や評論家等の約700件に配布し、研究者等の参考に資している。

(5) 特別映写等による外部への研究協力

大学等の映画に関する研究・教育等及び映画製作等のための調査への協力の一つとして特別映写の機会を提供している。この制度を活用して、平成16年度は前年度に引き続き、東京藝術大学の映像・舞台芸術実験授業、およびNPO法人映画美学校が主催する映画上映専門家養成講座の上映講義への協力を継続するとともに、新たに6月から明治学院大学文学部芸術学科の授業に対し、定期的な協力を行った。また、東京大学、早稲田大学、成城大学、東京造形大学、京都大学、京都造形芸術大学などの映画研究者にも、論文執筆や研究発表の一助として、特別映写の機会を提供した。その他、映像三団体連絡会、協同組合日本映画撮影監督協会、社団法人シナリオ作家協会、日本映画ペンクラブ、社団法人映像文化製作者連盟、NPO法人日本映画映像文化振興センター等映画関連団体の研修への協力や、関東大震災や横山大観等に関する映画・映像作品の製作に際し、映画・テレビ製作会社等への協力を行った。

2. 客員研究員等の招聘実績(年度計画記載人数:3人)

所蔵映画フィルムの総合的なデータ分析とカタログ及び目録作成

<p>客員研究員氏名:北小路隆志(千葉大学非常勤講師、他)</p> <p>研究内容:戦前期の所蔵日本ニュース映画の目録作成のために、各プリント内容の調査研究、データの集積及び必要に応じて不足分データの補充と、データベースとして全体の統一を図るための調査研究。</p> <p>展示企画に関わる資料の調査</p> <p>客員研究員氏名:田中眞澄(映画史家)</p> <p>研究内容:展示企画「映画女優 高峰秀子展」および次年度実施予定の展示企画の開催のため、映画史・近代文化史に関わる資料の調査・分析および企画立案に関連する研究。</p> <p>外国映画に関する事業等の企画の共同研究</p> <p>客員研究員氏名:溝口彰子(フリー翻訳者)</p> <p>研究内容:平成16年度以降に実施を検討している上映事業にかかわる調査、及び国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)加盟の同種機関との映画史的、アーカイブ的な事例に関する調査等。</p>
<p>3. 調査研究費 予算額 40,347,000円 決算額 32,225,576円</p>

自己点検評価

<p>【良かった点、特色ある取組み】</p> <p>「キューバ映画への旅」と「日本アニメーション映画史」の実施に関する調査研究については、それぞれキューバ大使館、渡辺泰氏からの資料提供を得ることができた。</p> <p>近年、国内の大学やその他の団体が映画の研究のためにフィルムセンターの特別映写観覧を利用することが多くなってきている。この結果、研究者が集うことになり、その情報の交換や交流が映画研究に役立っている。</p> <p>【見直し又は改善を要する点】</p> <p>フィルム・アーカイブとしての調査研究は、国内に同種機関が少ないため、その殆どが国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)加盟の諸外国の同種機関からの情報提供により進められていることが多い。今後は、フィルムの保存研究について、国内の大学や民間との連携を図り、より一層充実させることを検討していく。</p>
--

* 添付資料

調査研究一覧(事業実績統計表 p.55)

4. 教育普及

中期計画

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。
また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。
また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

方針

1. 資料収集及びレファレンス機能の充実
図書室では、わが国で刊行された映画関係の図書をできる限り収集し、閉架式閲覧サービスを行うとともにコピーサービスを実施する。なお、新刊雑誌や利用度の高い基礎文献・雑誌については開架で閲覧できるスペースを整備する。
2. 映画鑑賞を通じて子どもたちの幅広い人間形成に資することを旨とする。
3. 講演会等の実施
国際映画シンポジウムでは、映画を巡る様々な課題を取り上げることで、映画史研究に新しい視点を提供することを目指し、上映会又はフィルムアーカイブ活動に因んだ講演会等の実施により、広く映画に関する理解を深める。
4. 映画製作専門家養成講座の開催
映画、テレビ、ビデオ製作など、映像製作の諸分野で助手等の現場経験を有する人や映画・映像に関する専門学校などで実習経験を有する人を対象とし、日本映画の優れた伝統を継承し、次世代の映画製作現場を担うことのできる豊かな人材を育成することを目的とする。
5. 博物館学実習を行うことにより、将来の映画研究者等を育成する。
6. 次の発行事業を実施し、広報活動の充実を図る。
・「優秀映画鑑賞推進事業」鑑賞の手引きの発行

- ・展示室での展示企画のチラシ
- ・展示室での展示作品の出品リスト
- ・講演会チラシ
- ・「NFCニューズレター」の発行 隔月刊 6冊
- ・企画上映のための「NFCカレンダー」を発行 企画毎発行
- ・「こども映画館」チラシ

7. ホームページを活用し、フィルムセンターの概要、企画上映を含む活動一般などの情報の公開に努めるほか、職員募集などにも積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を図る。
また、ホームページで発信できる情報についての検討を行い、できるものから順次更新を図る。

実 績（総括表）

- (1) - 1 資料の収集及び公開
 収集件数(図書) 24,401冊(平成16年度間)
 公開場所(図書) フィルムセンター図書室
 利用者数(図書) 3,120人
- (1) - 2 広報活動の状況
 刊行物による広報活動
 ホームページによる広報活動
 マスメディアの利用による広報活動
- (1) - 3 デジタル化の状況
 所蔵映画フィルムについてのデータベース構築のための作品タイトル及び監督等のスタッフ、出演者等のキャストやフィルムの長さ等のデータ等を文字情報としてデジタル化を実施。
- (2) - 1 児童生徒を対象とした事業
 小・中・高校生を対象とした「こども映画館」の実施 12回 719人
 相模原分館における児童生徒を対象とした上映会 2回 216人
- (2) - 2 講演会等の事業
 講演会 1回 106人
- (3) - 1 研修の取組
 映画製作専門家養成講座の実施。
- (3) - 2 大学等との連携
 平成14年度から再開した博物館学実習生の受け入れを継続。
- (3) - 3 ボランティアの活用状況
 7階展示室での映画の歴史等の解説やこども向け上映会での解説へのボランティア等との連携協力を検討した。
- (4) 渉外活動
 前年度に引き続き「こども映画館」へ参加したこどもたちへの記念品の提供について企業から協力を受けて実施した。また、展示映像への著作権者として映画製作者からの協力を受けた。
- (5) 教育普及経費 予算額 62,386,000円 決算額 59,734,338円
- (6) その他
 博物館学実習生の受入等の教育普及事業を実施した。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成16年度の「こども映画館」では、上映企画と展示企画を連動させた形式を用いることができ、さらに美術館本館・工芸館との合同企画「KIDS MOMAT」への参加、こども向けセルフガイドの作成など新しいサービスを付加することができ、観覧者の好評を博した。このことは、今後の児童・生徒向け企画を活性化させていくための足がかりとなったと考える。

【見直し又は改善を要する点】

映画教育機関の設立が相次いでいる事情に鑑み「映画製作専門家養成講座」は平成16年度の第8回以降は見直しを含めて検討するが、今後も将来の映画製作を担う学生や若手の映画製作関係者が35mmフィルムで過去の作品

を鑑賞するための環境整備は重要であり、アーカイブとしてのフィルムセンターが新たに人材養成に貢献できる道を検討する。また依然として「こども映画館」の入場者数が伸び悩んでいるため、プログラムの質的な拡充を含めた改革を行う必要がある。

渉外活動については、平成16年度は一部の企業や映画製作者からの協力を受けたが、今後はより積極的にフィルムセンター業務充実のための企業との連携を目指していく必要があると考える。

* 添付資料 教育普及件数の推移 (事業実績統計表 p.16)

(1) - 1 資料の収集及び公開（閲覧）の状況

中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

実 績

1. 収 集

件数 2,024件(目標 - 件)

2. 公 開

公開場所 フィルムセンター図書室(4階)

公開日数 228日間

公開件数等

・利用者数 3,120人

・公開資料数 24,401件

・閉架利用件数 1,023件

・複写利用数 1,182件(15,029枚)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成16年度には新たな試みとして国内で開催された様々な映画祭のカタログ類545冊を対象に、公開に必要な装備と登録作業を行い、この結果図書検索システム(OPAC)を使った館外からの検索にも対応が可能となった。資料の提供では、ゆまに書房による『映画旬報』の復刻(「資料・戦時下のメディア 第1期 統制下の映画雑誌」第5回配本)のための原本提供を行った。

閲覧業務では、これまで火曜日から金曜日であった開室日を改め、平成16年度より土曜日の開室を増やすとともに、開室時間を従来の10:30～18:00から12:30～18:30に改めた。これはアンケートなどによる来館者の意見で休日の開館を求める声が多かったことを踏まえたものである。

【見直し又は改善を要する点】

資料の公開には、図書室での閲覧をはじめ展示やデータベースによる情報化、貸出や図版提供などがあり、一般の来館者へのサービスから出版や放送を通して社会への還元を行うケースまで様々だが、資料の収集・整理・保存、公開、データベースの構築といった業務を担当する係の正規職員が1名しかいないため、全体のバランスを保ちながらそれぞれの改善を少しずつ進めているのが現状であり、劇的な改善を行うことが難しい。

(1) - 2 広報活動の状況

中期計画

(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。

また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

実績

1. 刊行物による広報

(1) NFCニューズレター

発行年月日 偶数月発行(発行回数6回、発行部数6冊)(年度計画記載発行回数6回)

料金 1部300円

配布先 会場での販売、運営委員等、各都道府県の中央図書館、大学等

(2) NFCカレンダー

(3) 平成16年度優秀映画鑑賞推進事業 鑑賞の手引

(4) 展覧会出品目録・ガイド

ア. 造形作品でみる 岡本忠成アニメーションの世界 出品リスト

イ. 映画女優 高峰秀子展 出品リスト

ウ. のぞいてみよう! アニメーションの不思議 造形作品でみる 岡本忠成アニメーションの世界 セルフガイド

(5) その他の広報印刷物

ア. 展示チラシ

イ. こども映画館(作品解説及び上映スケジュール)

2. インターネットを用いた広報

平成16年度は、前年度に創刊したフィルムセンターの上映・展示企画や刊行物などの最新情報を電子メールで提供する「NFCメールマガジン」の購読者が1,700名を超えた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

企画の広報活動としては、上映企画ごとの「NFCカレンダー」や展示企画および「こども映画館」のチラシを作成し、これらの情報をフィルムセンターのウェブサイトでも公開した。平成16年度は、企画の内容に応じた情報掲載の依頼先(新聞・雑誌・ラジオ・テレビなど)の分析、外部メディアを通じた招待券の提供、掲載媒体のデータ蓄積など、企画の効果的な紹介をさらに増強した。また、フィルムセンターの事業紹介媒体としては、隔月刊の「NFCニューズレター」がある。企画関連の記事から映画保存の最新情報までの幅広いテーマを扱い、映画関係者、研究者などに引き続き広く配布した。

そのほか、修学旅行で東京を訪れる小・中学校の児童・生徒などの訪問者を積極的に受け入れ、研究員がフィルムセンターの役割と事業を解説するなど将来のフィルムセンターの観客への理解促進に努めた。

また、「NFCメールマガジン」の購読者が1,700名を超えたことから、この取り組みにより、従来からの観客層への広報の充実だけではなく、新しい観客層の掘り起こしの効果をも見込んでいる。

【見直し又は改善を要する点】

今後もホームページによる迅速な情報提供の充実を図るとともに、広報活動に対する一般利用者の意見の収集に努め、広報活動の一層の充実に努めたい。

(1) - 3 デジタル化の状況

中期計画

- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。
また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

実績

1. 所蔵作品のデジタル化

- (1) 所蔵映画フィルムについてのデータベース構築のための文字情報のデジタル化を実施。

平成16年度にデジタル化したデータ件数 7,942件(目標 - 件)

平成16年度末収蔵作品数 44,450件

平成16年度末デジタル化作品数 44,450件

今後のデジタル化の対応 毎年収集した映画フィルム数をデジタル化予定

- (2) 所蔵映画関係資料についてのデータベース構築のための文字情報のデジタル化を実施。

平成16年度にデジタル化したデータ件数 16,621件(ID付与の作業分を除く)

平成16年度末収蔵資料数 約86,637件(スチル写真及びポスター、撮影台本)

平成16年度末デジタル化資料数 70,507件

今後のデジタル化の対応 新規収蔵資料のデジタル化と既存の資料の遡及登録をともに行う予定

2. ホームページのアクセス件数 (東京国立近代美術館の件数による)

3. デジタル化した情報の公開 なし

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

内部管理用のNFCD(所蔵映画フィルム及び所蔵映画関係資料のデータベース検索システム)についての開発が終了し、このデータベースを利用した所蔵フィルム情報の公開システム開発に着手した。

外部へ接続しているインターネット用専用回線を128Kbpsから1500Kbpsへ変更することにより、接続速度を速めた。この結果、本館との間で容量の大きなファイルを電子メールで送受信することができるようになるなど、事務効率化の一助となった。

【見直し又は改善を要する点】

平成16年度予算において文化庁が「日本映画データベース」の構築に着手した。これに伴い次年度はフィルムセンターのNFCDとの連携について検討を行う。

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

中期計画

(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。

また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

実績

1. 小・中・高校生を対象とした「こども映画館」の実施

12回

参加者数 719人(平成16年度のみ)

担当した研究員数 5人

2. 相模原分館における小・中学校の児童生徒を対象とした上映会

実施回数 2回(平成15年度実績2回)

参加者数 216人(平成15年度実績 214人)

担当した研究員数 1人

事業内容

・平成17年3月2日、相模原市立由野台中学校3年生(上映作品「ブラック・ジャック」)

・平成17年3月22日、相模原市立由野台中学校2年生(上映作品「夏の庭 The Friends」)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

将来の映画観客となる小・中学生を主たる観客に想定して、こどもたちに映画の面白さ、とりわけ日本映画の素晴らしさを知ってもらい、同時に映像に対する理解力を高め、情操教育にも資するよう企画する上映会「こども映画館」を夏休みと春休みの時期に開催した。平成16年度は、上映企画「日本アニメーション映画史」や展示企画「造形作品でみる岡本忠成アニメーションの世界」を実施したこともあり、日本の短篇アニメーションの秀作を選んで番組を編成し、さらに研究員による解説を加えて展示企画との連動も図った。また、地元の中央区教育委員会の協力を得て、中央区内の公立小・中学校の全生徒へのチラシの配布が可能となった。

【見直し又は改善を要する点】

「こども映画館」は夏休み実施分についてはかなりの参加者を得たものの、春休み実施分については参加者数が伸び悩んだ。今後は、イベント的・ワークショップ的な性格を持たせる、実施時期を再検討するなどの方策により児童・生徒に参加しやすい環境を整える。

相模原分館におけるこども向け上映会は、学校からの要請に応じて、相模原市教育委員会を窓口として実施している。市内全域の小・中学校への周知は行われているが、相模原分館近隣の小・中学校からの依頼が顕著であり、上映回数は年々減少傾向にある。保護者や学校関係者等からの意見を参考にしながら、子どもの生活に適合したスケジュール作り、学校カリキュラムとの連携などを視野に入れるなど、一層の検討をしていく必要がある。

(2) - 2 講演会等の事業

中期計画

(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。

それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。

実績

1. 講演会

開催日時:平成16年12月7日(火)午後4時から午後6時

開催場所:東京国立近代美術館フィルムセンター小ホール

講師:常石史子(東京国立近代美術館フィルムセンター研究員)

テーマ:「デジタル復元の現在」

平成16年度にフィルムセンターが角川映画株式会社と共同で『新・平家物語』(1955年、溝口健二監督)のデジタル復元を行ったことを踏まえ、社団法人日本映画テレビ技術協会との共催で講演会「デジタル復元の現在」を開催した。カラー長篇映画のデジタル復元はわが国初の試みで、オランダの復元専門ラボで作業を行った復元フィルムをはじめ、いくつかの修復結果をフィルム映写で比較しつつ、ヨーロッパにおけるデジタル復元技術の現状を紹介した。後半では『瀧の白糸』(1933年、溝口健二監督)の例に即して、ようやく端緒についた国内のこの分野での取り組みと、今後の展開について考察した。

参加人数:106名

2. ギャラリートーク

開催日時:1回目:平成16年12月18日(土)午後1時～午後1時30分、聴講者数:16名

2回目:平成17年1月22日(土)午後1時～午後1時30分、聴講者数:29名

3回目:平成17年2月19日(土)午後1時～午後1時30分、聴講者数:24名

開催場所:東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室

講師:田中真澄(映画史家)

開催回数:3回

参加人数:計69人

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

講演会「デジタル復元の現在」は、急遽実施が決定したにもかかわらず、日本映画テレビ技術協会との共催となったため、映画関係者をはじめ、テレビ関係者や映像・写真に関する学会員、デジタル技術者など、映画関係者以外の来館者も多数あった。内容的にも、映画復元の実務的側面を丁寧に解説したものとなり、とりわけ日本でこれから発展が期待される映画復元技術の関係者に好評であった。

またギャラリートークは初の試みであったが、来場者を増加させ、長期の展示企画を活性化させる効果が認められたため今後も継続したい。

【見直し又は改善を要する点】

講演会・シンポジウムは、従来のような映画保存の“先進国”の事例に学ぶスタイルだけでなく、近年はフィルムセンターで進行中の事業を解説する形式も多くなっている。そのため年度途中に実施が決まる例もあり、会場確保など他の企画との調整に留意したい。

(3) - 1 研修の取組

中期計画

- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。

実績

1. 映画製作専門家養成講座

講座日程と受講状況

コーディネーター: 宮澤誠一氏

第1講 平成17年3月9日 講師: 長沼六男(撮影監督) 受講者数: 62人

第2講 平成17年3月10日 講師: 長沼六男氏(撮影監督) 受講者数: 59人

第3講 平成17年3月11日 講師: 安藤庄平氏(撮影監督) 受講者数: 58人

第4講 平成17年3月12日 講師: 川上皓市氏(撮影監督) 受講者数: 54人

開催場所 東京国立近代美術館フィルムセンター小ホール

参加者数 86人(内修了者数48人)(平成15年度実績101人)

担当した研究員数 2人

事業内容

日本映画の優れた伝統を継承するとともに将来の映画人を育成することを目的として平成9年度より開講された映画製作専門家養成講座は、平成17年3月9日から12日にかけて、小ホールを会場にその第8回目を開催した。今回は前回に続き、日本大学芸術学部の教授として教鞭をとりつつ、現役の映画編集者としても活躍中の宮澤誠一氏をコーディネーターとして迎え、各日のゲスト講師として招かれた撮影監督とともに「撮影技術 - 伝承のかたち2」というテーマで講義を実施した。今回の講座で招かれた講師は、現在最前線で活躍している中でもベテランに属するカメラマンばかりであり、それぞれの担当作品を通じて、技術の伝承が具体的に語られた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成16年度は前年度に続いて、脱スタジオ化や撮影のデジタル化が進む日本映画の傾向を踏まえながら、撮影技術の伝承の多様なかたちを探る講座となった。第一線の映画人ならではの自負と技術的経験に支えられた語り口とともに、これから映画製作を目指す受講者に少なからぬインパクトを与え、現代の映像作りが伝統的な映画製作とどのように接し、どのように今後の映画製作に活かせるかが浮き彫りにされた。とりわけ今回は、前回以上に若年層による受講が多かったことも特筆される。

【見直し又は改善を要する点】

平成16年度は、前年度に続いて第一線で活躍中の撮影監督を講師として招き、前年度のように講師陣が未確定のまま広報を行うことはなかったものの、講師の仕事とのスケジュール調整のため講座のプログラムをまとめるのに通常以上の時間と労力を費やしたのは反省点として残る。

(3) - 2 大学等との連携

実績

1. 博物館実習生の受け入れ

受入期間 平成16年7月27日～平成16年7月31日(5日間)

開催場所 フィルムセンター及び相模原分館

参加者数 16人(平成15年度実績12人)

担当した研究員数 6人

事業内容 講義・館内見学・映画資料整理・課題発表

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成16年度は11大学より16名の実習生を受け入れ、フィルムセンターの歴史と運営、フィルム・アーカイブの理念、各部門の仕事、相模原分館におけるフィルム保存の実際、フィルムの取り扱いなどを講義するとともに、実習として9.5mmフィルムのデータ作成、スチル写真の整理作業、上映企画の事前調査に当たさせた。例年、網羅的な映画の収集・保存・復元を行うフィルム・アーカイブ活動の重要性を伝えるために講義に力点を置いてきたが、今回は具体的な実務体験も充実させたことにより、さらに効果的な実習になった。

【見直し又は改善を要する点】

実際の映画フィルムそのものに関する分析調査や分類整理など、フィルム・アーカイブの他の基本業務についても実習で扱いたいと考えた結果のカリキュラムとなったが、16名という人数は、受講生に対して決めの細かい指導を行うには、受入可能人数を超えていたように考えられるため、今後は、受け入れに当たり人数制限を設けるなどの新しい受け入れ態勢を検討する必要がある。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

実績

1. 登録人数

なし

2. 活動内容

なし

3. 今後の取り組み

7階展示室の映画部門専有化に伴う映画の歴史等の解説や、「こども映画館」における上映前トークなどを行うボランティアの導入について検討した。

自己点検評価

美術館及び工芸館での活動状況を踏まえて、7階展示室での解説や「こども映画館」での解説ボランティア等導入の検討を行っていききたいと考えているが、フィルムセンターは、大衆芸術である映画(娯楽)を取り扱っているため、本館・工芸館と異なり、アート・ミュージアムにおけるボランティアのスタイルとして一般的になっている作品解説ボランティアは馴染み難く、この点を考慮に入れた導入について検討を行っていききたい。

(4) 渉外活動

中期計画

(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

実績

1. 企業等との連携

共催上映の実施

・「内田吐夢監督選集」(NPO法人東京フィルメックス実行委員会)

「こども映画館」を実施するに当たり、昨年に引き続いて企業(株式会社IMAGICA)の協力により記念品の提供を行った。

講演会等の実施

・「デジタル復元の現在」(社団法人日本映画テレビ技術協会)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成16年度は、上映企画の実施に関して、引き続き外部との連携を積極的に模索・実行した。アジア映画の豊富なコレクションで知られる福岡市総合図書館との共催となった「アジア映画 “豊穡と多様”」、映画祭との部分共催となった「内田吐夢監督選集」はいずれもフィルムセンターにとって新しいパートナーシップを形成した。フィルムセンターの豊富な映画コレクションと優れた上映施設、企画運営のノウハウを外部にアピールしつつ、今後も各方面との共同開催を探ってゆきたい。このことは講演会・シンポジウムについても同様である。

【見直し又は改善を要する点】

事業運営、広報、サービスを充実するため、企画上映及び展覧会への新聞社、企業、メセナ財団の協力や支援を得る方策の検討を行う必要がある。

5. その他の入館者サービス

中期計画

- (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

実績

1. 高齢者・身体障害者のための施設整備等 (1)-1
 - 障害者トイレ 1個所(1階1個所)
 - 障害者エレベータ 2基
 - 段差解消(スロープ) 1個所(正面玄関)
 - 貸出用車椅子 2台(1階)
 - 自動ドア 1箇所(正面玄関)
 - 大ホールの男子・女子トイレへの階段壁面に手摺りを設置した。
 - 展示室内の映像モニター鑑賞用に椅子を配置
 - 「映画の広場」の椅子を増やし、上映ホールの開場前に並ぶ入館者の至便を図った。
 2. 観覧環境の充実 (1)-2、(1)-4
 - 7階展示室での映像モニターの導入により、わかりやすい展示環境を整備した。
 3. 夜間開館等の実施状況 (1)-3
 - (1) 上映開始時間の変更等
 - 引き続き、平日夜の回の上映開始時間を30分繰り下げ、午後7時からとした。
 - (2) 入場者料金の取り組み
 - ア. 小・中学生の入場料の低廉化の一環として、展示室の小・中学生料金を無料とした。
 - イ. 展示室の学生料金を大学生料金と高校生料金に分け、高校生料金を下げることにより、料金を低廉化。
 - ウ. 65歳以上の入館者に対する観覧料金は学生料金を適用。
 - エ. 上映会観覧当日に限り、展示室観覧料は団体料金を適用。
 - (3) その他の入館者サービス
 - ア. 館内での案内情報の充実
 - ・1階受付カウンターで館内の案内情報を提供。
 - ・1階、2階、4階及び7階の来館者が利用できるフロアにパンフレット台を設置し、上映プログラムや展覧会等のチラシを配布。
 - イ. 休憩スペースの充実
 - 1階エントランスロビーへ移動した「映画の広場」を来館者の休憩場所とした。
 4. アンケート調査(1)-3
 - 調査期間 企画上映アンケート調査の際に実施
 - 調査方法 入場者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
- (上映)
- アンケート回収数 1,399 件(未回答を含む)
- アンケート結果 ・良い60.9%(853件)・普通9.0%(129件)・悪い1.4%(20件)

(展示)

アンケート回収数 202 件(未回答を含む)

アンケート結果 ・良い63.1%(137件)・普通16.5%(36件)・悪い1.3%(3件)

5. 一般入館者等の要望の反映 (2)

開場前に並んでいる入場者の便宜を図るため、2階エレベータホールへ18席の椅子及び上映会場入口へ通じる階段部の踊り場へ椅子を設置した。

6. レストラン・ミュージアムショップの充実 (3)

フィルムセンター1階にあったレストランから撤退の意向があり、前年度末に閉店した。フィルムセンターの観覧者は、一つの企画上映をほぼ全作品にわたって鑑賞するリピーターが多く、金額面からほとんどレストランを使用していない状況でもあり、また近隣にコンビニエンスストアやレストランが多く、入館者に対してのサービス低下を招かないとの結論により、新たな出店業者の募集を行わないこととした。

フィルムセンターでは、施設規模の面からミュージアムショップ等のスペース確保が難しいが、会場入口の受付において出版物等の委託販売を行い、来館者へのサービスに努めた。

展示企画「造形作品でみる岡本忠成アニメーションの世界」に合わせて、フィルムセンター初めてのグッズ「岡本忠成フィルムしおり」を作成し、販売した。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

健康増進法(平成15年5月1日施行)により、前年度に館内を禁煙、屋上庭園を喫煙場所としたが、正面入口の前での喫煙者が多く、また中央区が「歩きたばことポイ捨てをなくす条例」を平成16年6月1日から施行したため、1階のロッカールームを喫煙所に改修し、ロッカーを上映ホールのホワイエに移設した。

これまで展示室及び企画上映の会場では、フィルムセンターの刊行物のみを販売していたが、引き続き一般書店では取り扱われていない映画関連図書の委託販売を行い、好評を博した。

今後ともアンケート調査等により、来館者のニーズを把握・分析し、上映開始時間の見直しや展示室、図書室その他の利用者に対するきめ細かいサービスを実施していきたい。

展示企画に合わせて作成し販売したグッズ「岡本忠成フィルムしおり」は、フィルムセンターには熱心な映画観客が存在する一方、東京のミュージアム散策の一環としての来館者も多いため好評であった。今後も継続的に実施したい。

【見直し又は改善を要する点】

来館者の要望を踏まえ、1階に自動販売機を設置することについて検討を行いたい。

また、リピーターが多いという特性から、回数券の導入や、割引を受けられる会員制度についての要望が寄せられている。これについても、観覧者サービスの観点と収入のバランスを考慮しつつ、今後検討していく必要がある。

開かれた施設を目指し、できるだけ多くの来館者が満足できる入館者サービスを実施するには、現状の施設、人員や経費の面で困難が伴うが、今後も入館者の要請に応えられるようきめ細かいサービスの確保、提供に努めていくことは重要と考える。